

# 昭和戦前期の生活主義教育における 言語活動意識

黒川孝広

## — 要旨

昭和戦前期での生活主義教育は、国語教育では生活綴方との関係で取り上げられることがあるが、それ以外での言及は少ない。しかし、その中には、言語活動を授業で積極的に取り入れる意識が見られる。生活主義教育の中でも城戸幡太郎と黒滝チカラ、村山俊太郎の言語活動意識の特徴は、生活向上の観点から子供の主体的な言語活動を意識していたこと、社会生活での音声言語利用の比率から文字言語よりも音声言語の活動を重視したこと、人間関係構築の行為として言語活動の意識を持っていた点が特徴的であった。特に、黒滝チカラが言語活動を重視した要因が、自らの体験の大正自由教育にあったので、生活主義教育の言語活動への意識には、大正自由教育の影響が少なからずあったと言える。

## 1. 研究の目的

昭和戦前期での生活主義教育は教育運動の面で注目され、国語教育ではあまり注目されていない。生活主義教育を日本教育労働者組合（教労）や新興教育研究所（新教）から始まり、雑誌『生活学校』のグループ、そして教育科学研究会の動向までと捉えると、その一部はプロレタリア教育運動として扱われている。国語教育では生活主義教育を生活綴方との関係で取り上げられることがあるが、それ以外での言及は少ない。しかし、その少ない言及の中には、言語活動を授業で積極的に取り入れる意識が見られる。

大正自由教育に関わっていない教育者や昭和初期の生活主義教育ではない教育者の中には国語教育で積極的に言語活動を取り入れようとした主張が見られる。その主張をしていた生活主義教育とは関わりのない教育者と、生活主義教育の教育者とは直接に交流の記録は探すことはできなかったため、関係性については立証できない。しかし、影響関係のない教育者たちが、ほぼ同時期に言語活動を国語教育に積極的に取り入れようとしたのには、何か共通する問題意識があると思われる。それゆえ、それらの問題意識を明らかにすることは、これらの主義を越えた昭和戦前期の国語教育の問題点を浮き彫りにすることになる。生活主義教育での国語教育について、その中でも特に言語活動を重視した教育者の言

論を調査することは、戦前期の国語教育の問題を明らかにするための第一段階になると思われる。

本研究では、これらから、生活主義教育の教育者が、どのようにして国語教育に言語活動をとり入れようとしたのか、この意識を明らかにするものである。

## 2. 生活主義教育の興隆

生活主義教育について、先行文献から、下記の通りに整理する。

昭和初期までの生活教育は主に師範附属などで実践され、教材の題材を生活の中から取り出すことであるので、すでにある日常生活を対象としている傾向が多かった。中でも都市の子どもを対象にした消費生活を扱ったものが多い。それに対して、農村の教師たちは、子どもの生活実態を観察したところ、ほとんどの子どもが生活苦に追われていて、学校の学習活動よりも、田畑などの生産活動に対して活躍することに注目した。そのような状況においては中央でのさまざまな教育政策は通用することはできないと判断し、独自の教育方法を考え出す教師が出てきた。それは綴方を通して自らの生活を見つめて、今後の生活を向上すべき方策を考えさせる教育であり、それが生活綴方である。生活綴方は、現状の生活分析から、これから理想の生活を作ろうとする。綴方自体は国語教育の範囲であるが、理想の生活を作ることは国語科以外の範囲を扱うことになり、教科を越えた内容であるので、生活綴方教師の中からは「生活科」として独自教科の設置を求める声も上がるなど、生活綴方を一つの教科のように意識している教師もいた。

これらの生活綴方に対して、より教育を科学的に研究し、「生活の向上」という抽象的な概念から、より高次に定義できるものを求める教師たちがいた。これらの教師たちは後に生活主義教育として自覚するのであるが、これらの教師たちは意見交換の場としてそれぞれの立場から雑誌を刊行し、『教育・国語教育』<sup>(1)</sup>、『生活学校』<sup>(2)</sup>、『綴方生活』<sup>(3)</sup>など、後に影響を与えるようになった。これらの雑誌には各地の教育現場の教師が、それぞれの地域で行った実践を発表している。特に『教育・国語教育』は、言語学や国語学の研究者による教材分析や教育方法の理論などが掲載され、実践と研究を包括する雑誌として、啓蒙的な意識も強く、時には特集号を発刊するなど、当時の国語教育へ影響を与えた雑誌の一つになっている。

現場の教師が実践を報告する中で、研究者側からは教育を科学的に検討しようとする動きが出てきた。その要求に応えるために、1931（昭和6）年10月から1933（昭和8）年3月まで、岩波講座『教育科学』（全20冊）が刊行された。この講座は心理学者の城戸幡太郎が中心となり刊行され、その意図は「実験心理学的方法と対応する教育研究の実証的方法への転換の要請」と「問題領域の遠心性」にあると、山田清人は指摘する<sup>(4)</sup>。

この講座の付録として刊行された冊子「教育」は、1933（昭和8）年4月に月刊雑誌『教育』に切り換えられた。その後、1936（昭和11）年頃より雑誌『教育』からさまざまな研

究グループ・地方支部が発足し始めた。しかし、創刊当初、研究者の論文が多かったこの雑誌には、教育現場の教師と研究者の意見交換が少なく、より現実に即した形の方法論を提示できなかった。それゆえ、その教育現場の教師と研究者の交流のため、1939（昭和14）年4月に各研究グループを集結した「第一回教育科学研究協議会」を開催し、全国組織として再出発することになった。そのきっかけとなったのが言語教育部会の活動である。当時は「えんぴつサークル」のメンバーが合流し、その中にはすでに後に活躍する平野婦美子<sup>(5)</sup>や滑川道夫<sup>(6)</sup>らがいた。このメンバーの構成は教育現場の教師と研究者によって構成された。教育現場の教師と研究者の交流を全国的に展開できないかと考え、協議会を開催したのである。この協議会をきっかけに、研究グループや地方支部は1937（昭和12）年5月に全国組織の「教育科学研究会」（以下「教科研」とする）を発足し、1941（昭和16）年4月に解散するまで続いた。この会の目的は「教育科学ノ建設ヲ以テ目的トシ、広義教育ノ批判、改革ノ研究審議ヲナス。」とあり、教科を越えて、教育現場と研究の両面から改革する運動体としての方向性を持って発足した。

教科研には雑誌『生活学校』の廃刊などから、生活綴方教師が多く合流したが、生活綴方教師以外の教師も参加していた。それゆえ、教科研は生活綴方の発展と、同時にそれまでの教育を科学的に検証していく科学性とを持ち合わせる会となったのである。

城戸幡太郎は教科研の運動を次のように回想している。

「教科研」は教育の「生活主義と科学主義」を標榜して教育運動を展開するようになったのです。

生活主義とは、教育は国民の生活権を保障することによって、国民生活の安定と慶福を願うことであり、そして科学主義は、その目的を達するための科学的方法を研究することでした。<sup>(7)</sup>

この生活権の保障は生活向上のために行うものであり、教育現場の教師が実践により達成できるものである。一方、科学主義は研究者の立場から教育方法や内容を教育の論理から考えようとするものであり、この科学主義が特定の思想性に偏ることなく運動を展開できると思われたのであろう。

しかし、1940（昭和15）年2月6日の村山俊太郎の検挙にはじまる官憲の弾圧を契機として、つぎつぎと教科研に関わった教育者はプロレタリア教育の名目から検挙され、弾圧されていった。1941（昭和16）年12月までに北日本国語教育連盟関係者が検挙され、鈴木銀一、国分一太郎、村山俊太郎等9名が起訴された。同時期には北海道綴方教育連盟関係者が検挙され、小鮎寛、坂本亀松、小坂佐久馬、松田文次郎等12名が起訴された。『生活学校』関係者では戸塚廉、増田貫一ら3名が、その他では寒川道夫などが起訴され、全国の教師約300名が検挙された。起訴事実の中で、教科研の加入自体が罪状として問われたのは、北海道の数名だけであったが、検挙された教育者のほとんどが教科研に一度は関

わりがあり、その勢いからは教科研にも影響が及ぶのは必至であったが、雑誌『教育』が直接刊行停止にはならなかった。教科研が全国組織になってからは独自の機関誌『教育科学研究』（1939（昭和14）9月-1941（昭和16）年4月）を刊行し、雑誌『教育』は教科研の機関誌という枠組みではなかったからである<sup>(8)</sup>。それでも雑誌『教育』は官憲の干渉を受けながらも、雑誌統制により1944（昭和19）年3月号で発刊停止になるまで刊行することができた。教科研は生活綴方の影響を濃く受け、研究者と教師との意見交流を通して、城戸幡太郎、留岡清男等の教育の科学的な究明を目指したものであり、戦前期の教育者への影響は大きかったと言えよう。

### 3. 生活主義での言語活動意識

#### 3-1. 生活教育論争での言語活動意識

生活主義教育の中で、国語教育に関わる論争としては、生活教育論争がある。教育論争は時として、教科の内容や構造までに触れることがあるので、取り上げる。

1935（昭和10）年に雑誌『教育』上に展開された、後の教科研のメンバーが『生活学校』で活躍していた教師の生活綴方の授業を見学し、その授業の問題点を指摘した記事が始まりである。

後の教科研の中心となる人物の一人である留岡清男は北海道で綴方教育の実践を参観した。その参観の記録と授業批判を雑誌『教育』に掲載した<sup>(9)</sup>。留岡清男はこの実践が科学的な根拠を持たないで指導していることを批判した。

強調論者の実施の方法を聞いてみると、児童に実際の生活の記録を書かせ、偽らざる生活の感想を綴らせる、すると、なかなか佳い作品ができる、之を読んで聞かせると、生徒同士が又感銘をうける、といふのである。そしてそれだけなのである。私はいずれそれ位のことだろうと予想していたから別に驚きもしなかったが、そんな生活主義の教育は、教育社会でこそ通じるかも知れないが、おそらく教育社会以外の如何なる社会に於いても絶対に通ずることはないし、それどころか、却って徒らに軽蔑の対象とされるに過ぎないだらう。このやうな生活主義の綴方教育は、畢竟、綴方教師の鑑賞に始まって感傷に終るに過ぎないという以外に、最早何もいふべきことはないのである。

掲載された記事を読んだ城戸幡太郎は留岡清男と同じく、「綴方教育は児童の生活を理解し、生活態度を自覚せしむることはできるが、彼等の生活力を涵養することはできぬ」と生活方法を教える生活指導でなければならないと批判した<sup>(10)</sup>。

留岡清男の指摘は、「生活の記録」と「偽らざる生活の感想」を綴ることで、作品としてはよくできていると、まず実践について評価する。その上で、作品を読み合うことは「感

銘」を受けるだけであり、感動をしても、これからの生活を変えるまで意識を育成できていないとするのである。児童の作品自体は評価されても、それを指導する教師は、生活改善までの意識を持つべきだという主張である。城戸幡太郎の指摘は、生活綴方は現状認識をする過去の分析はできて、未来へ活かす行動力を育成できない点を述べている。両者の共通点は、現状の生活を改善する方向にまで教育は責任を持つのだという点にある。だが、城戸幡太郎も留岡清男も生徒の学習活動を問題視しているのではない。留岡清男が見学した授業は、集団で調べて、それを教室で議論し、次の問題点を探し、そしてそれをまた調べて、そして議論し、そこから綴り、お互いの作品について意見を述べ合うという授業の中の一時間であった。児童の学習活動は相互の交流など読む、書く、話す、聞くの活動が行われていたが、それよりも、学習の目標に問題点を指摘している。生活主義教育では、教育の目標を見定める事がこの時では重要な問題であり、学習過程について検討するよりも必要なことであった。

生活綴方の教師側にしてみれば、日々の授業活動で、目の前の児童を指導するのであるから、それなりの工夫や努力があったものの、牽引する役目を担う研究者からの批判は、当然として反論はしにくい。その後、留岡清男や城戸幡太郎の批判への反論として『生活学校』昭和13年1月号に「最近綴方人の動向鳥瞰」と題した特集を組んだ。岩手の高橋啓吾はそれまでの生活綴方を分析し、1934（昭和9）年頃を「文集はらん時代」であったとし、1936（昭和11）年頃より「大きい文集よりも指導過程のよい文集が価値的に見られてきた」ことから、生活綴方は作品を作ることから、指導していくことに変化が見られたと指摘した<sup>(11)</sup>。指導過程とは、児童に生活の状態を認識することから、文章執筆し推敲し、発表までの過程であり、当時の『生活学校』では、読む、書く、話す、聞くの活動が単独でなく、重なるように行われていた。そのことから見ても、綴方の作品の価値を重視したのが綴方教育の目標であると反論したのである。この指導過程こそ、教師の授業計画の検討の成果であり、その結果として指導である言語活動を重視することになるのである。

秋田の加藤周四郎は「表現教科」が「生活探求の自主性を色濃く出すことが出来る」ことから綴方を利用することを述べている。

- ・生活課題のために、子供たちは新しい現実探求をなしはたして行くこと。
- ・記述のために、これについてある社会的制約を自覚し、適応する文章技術を習って行くこと。<sup>(12)</sup>

児童が現実探究をするには、調査し、分析して、まとめ、それについての発表をともなう。それは「自主性」を伴って行うのであるから、児童の自発的な活動を重視することになる。明言はしていないものの、言語活動を重視した教育を指向していることがうかがえる。

それらの批評と反論を受けて、それぞれ実践家と研究者とで生活教育についての問題を議論することになった。その後、雑誌『教育』昭和13年5月号で「『生活教育』座談会」を特集した。この座談会の中で城戸幡太郎は、生活教育の目標を「子供の社会生活を保障」するものであると述べて、その関連で国語教育についても言及している。

子供の社会生活を保障するといふことは、社会生活をするやうになつた子供が、どういふ風な言語生活をしなくちやならんかといふことを考へ、それから教材を集めて教育すればいいじやないかと思ふ。さういふ点に於いて国語読本には社会生活に必要な教材がないと思ふ。

城戸幡太郎は、大人が子供自身にどのような言語生活をさせるのかを考慮して国語読本を作成すべきであり、社会生活に直結した教材を掲載すべきだと主張している。言語生活をしていくことは、単に綴方だけではなく、話す、聞くの活動を伴う。実際の社会生活では、話すことと聞くことが圧倒的に多い。それらから、音声言語を重視した国語教育への志向が城戸幡太郎にはあると言える。それまでの国語教育の多くが、読む、書くを重視した文字言語指導が中心であり、音声言語の指導の多くは、音読や朗読で、話し合いなどのいわゆるコミュニケーションとは異なつた、一方的な発声であることへの批判であつた。また、話す、聞くなどの言語活動では、「言語生活」という概念を用いて説明している点も、言語活動を広く生活の中での利用として位置づけていることもうかがえる。この「言語生活」<sup>(13)</sup>の語は、昭和初期の国語教育者では主として音声言語の意味で使用されていることが多い。その場合は文字言語である「国語生活」と対比して使用しているが、ここで城戸幡太郎は「国語生活」の語を使用していない。この点でも、城戸幡太郎は読む、書く、話す、聞くという活動を分けて考えるのではなく、「言語生活」という語を使用して、包括的に生活での言語を利用することをふまえているのであろう。この点についての証左として、1935（昭和10）年に城戸幡太郎が著した『国語表現学』<sup>(14)</sup>を見ると、これからの国語教育について、「話方の教育にも力を入れねばならぬ」、「綴方と話方とは並行して学習されねば完全な言語教育の目的は達せられぬ。」と述べている。城戸幡太郎は「言語教育」は「綴方」と「話方」の両方を重視すべきであり、分けて指導するものではなく、両方とも「並行して」学習すべきものであるという意識があつた。

生活教育論争の過程では、生活教育について見直すと同時に、それに付随して国語教育への言語活動の意識が、一部においてではあるが、生じていたということが言えよう。

### 3-2. 黒滝チカラの言語活動意識

生活主義教育者の中でも国語教育に積極的に発言したのは黒滝チカラ<sup>(15)</sup>であつた。黒滝チカラは留岡清男の「生活教育論争」の中心的論者であり、当初活動の地盤は『生活学校』にあつた。その後、1937（昭和12）年5月18日に設立された教科研の各部研究会委

員会である言語教育研究部会のメンバーとなった。この部会は「研究者的教育科学」と「現場的教育科学」の二つの性格を持ち、「えんぴつサークル」や研究者とのつながり役となった。この部会の中心的な人物として、城戸幡太郎とともに入ったのである。当時は、全国に講演や助言指導に出かけ、綴方教師にその名が知られていた。黒滝チカラはすでに1928（昭和3）年に「生活主義の教育」という草稿を作成していて、生活主義教育について早期から意識していたのである。また、生活主義教育の中心組織である教科研での国語教育の指導者としても活躍していた。黒滝チカラが『教育・国語教育』『綴方生活』『生活学校』などの雑誌に掲載した主張をまとめたのが、『生活主義 言語理論と国語教育』<sup>(16)</sup>である。

先ず同書で黒滝チカラは言語の力を次のように整理する。

正しく知り、正しく感じ、正しく考え、正しく情をわき立たせ、正しく行動を打ち出し、正しく生活を統制して正しく意志を貫く意識の力、その意識の働き方

言語を伝達の道具ではなく、思考の過程、そして生活を変えようとするための意識など、言語の外的な活動のみならず、内的な活動も含んでいる。生活主義教育が生活そのものを変えていくための行動を促進するのであれば、行動や意識を深めることを言語の力の中に含めていくことになるのは予想できる。また、別の箇所では言語の実力を、

思う力、言う力、書く力、読む力、聞く力、知る力

とし、現在の国語教育の4領域である、読む、書く、話す、聞くに加えて、「思う力」「知る力」という思考と情報収集の能力あるいは情動をも言語の力として考えている。一般的に国語教育では外言を言語活動として捉えるが、「思う」「知る」という内言を言語活動として捉えることはほとんどない。その点で、言語の力に「思う」「知る」を入れると言うことは、主体的に考えて、主体的に知識を獲得するという意図が込められている。言語を思考のための道具として捉えるのではなく、人間の活動そのものまでも含んでいる。このことは、個人の外言・内言の範囲に留まらず、他者との関係までも含もうとしている。その一つが「他人とただしい関係をつくり」であり、現在でいうところのコミュニケーションについても言語の力であると述べている。また、「生活をすすめて行く」ことも言語の力だとしていて、ここから生活主義教育には言語の力を伸ばすことが必要だという論理が働くのである。言語を人間生活に関わるものとして、伝達の道具としての言語を越えて、人間関係を構築し、生活する基盤になる要素が言語であると定義している。

続いて、国語教育に関しては次のように述べている。

ほんとうの国語教育は、——新しい生活言語教育は、言葉で表現されたものを正し

く理解する力、必要なことを言葉でただしく言いあらわす力、そうして、言葉の形をとつて物事を知る力、言葉の形をとつて物事を考える力をキタえることだ。今の教育の中から失われている主体としての人間（生活）と、客観としての世界（生活）とを取りもどし、言葉を通してその向こうを見るやうな力を持つ人間、言葉を支配する人間をみざす教育だ。

黒滝チカラは当時の教育の問題点である主体性のない学習に対して批判し、主体的に学習するために生活での言語を駆使する人間を育成する意欲を述べている。当時、国語教育を言語の技能を高める教育であることは、生活主義教育での共通した認識であった。その中で黒滝チカラは、ことばに伝達以外の大きな力を考え、それを活かす教育を国語教育と定義する。それは、人間の活動全般に影響するのである。

言語に支配されていた人間が、言葉を支配する所まで行くための、言葉と人間との競い合いだ。その競い合い、活動する人間が、物事に立ちむかう具体的な働きの中でこそ行なわれる。だから、それは教育のすべての場面でも営まれると共に、すべての仕事の効果を定める力を持っている。

ことばを自分のものとして受け取り、ことばで考える。表出することばを選択し、そのことばを発声する。そして、他者との関係を構築する。このようにことばに対しての意識を高めていくことで、人間として高まるという予測を立てている。

しかし、言語を扱う教育は国語教育以外にもある。そこで、黒滝チカラは、国語教育以外をも含む包括的な言語の教育を「生活言語教育」と定義するのである。まず、その位置を次のように説明する。

生活＞言語生活＞学習生活＞学校教育＞学科＞国語科＞読み方など  
生活＞〔生活〕教育＞言語教育＞学科＞国語科＞読み方など

生活教育の中に、言語教育があり、そしてその下位に国語教育があるとするのである。ここでの「言語生活」の位置は、生活の中に位置づけられていて、それは、生活の中で言語を使用することであり、人間の言語の行動として、包括的に定義している。二つのルートになっていることは、児童の学習過程という面と、教師の指導の意識という分類と考えられる。それは、「言語教育」の説明の箇所でも明らかになる。

言語教育——国語教育はけつきよく「生活のため言語によつてする教育」だ。だから言語教育を考えるには、何よりもまず「生活」「教育」「言語」とを見きわめることが必要だ。



生活と言語と教育の関係を教師が捉えること、そこから「生活言語教育」の本質が見えてくるとするのである。その「生活言語教育」については次のように説明する。

生活言語教育は、子供たちが、すべての学科はもちろん、もつと広い生活学習を行い、生活を高める言語の力を練ること、外から知識や技術をうけ取り、外へ知識や技術をつたえ、人間の正しい関係を生み出して行く言語の力を練ることなのは明かだ。

ことばを使い、情報を受信し、発信する。ただ伝達のみでなく、言語を通じて「人間の正しい関係を生み出す」こと、つまり、人間関係の構築までを言語の機能として位置づけている。それを「生活言語教育」とし、言語が生活を動かすので、生活主義教育とは矛盾せずに理論構築をしている。この言語と生活との関係については、村山俊太郎も言語学習が生活向上につながる点を次のように述べている。

子供たちに於いて、言語を知ること、生活を知ることだ。言語を矯正することは、生活のそのものの矯正に他ならない。言語の意味を知るとは生活の意味を知ることなのだ。(17)

このために「言語生活の基礎訓練」をすべきで、それによって「生活言語文化」を向上するとしている点では、黒滝チカラと共通する意識であり、生活主義教育者に見られる傾向であると言えよう。

では、黒滝チカラがこのような考えに至ったのはどのような理由があるのだろうか。

黒滝チカラは『国語の発展と国民教育』<sup>(18)</sup>で、外国との言語習得の量について比較する。それは、イギリスの小学校6年間で39,000の単語を学習するが、日本では小学校6年間で8,000単語を学習することを比較し、イギリスでは小学校で政治や経済の新聞記事が読めるが、日本では読めないことを問題点であると指摘している。そして、平均寿命を比べると、日本で男は42.1歳、女で43.2歳で、デンマークでは、男60.3歳、女61.9歳と差があり、その原因として労働時間の差を述べて、経済的な差が平均寿命に影響するというのである。それゆえ、日本では早期に教育する必要があると述べるが、日本語特有の問題として漢字の読みが複数あることで、学習の効率が上がらないことを指摘する。そこで、国語国字問題と生活との関係から、口語文の使用を進めようとした。

話し言葉の中に文字<sup>ママ</sup>お知らずに話し交わされている。ここに標準がある！

話しことばには、難しい漢字を使うことがないから、学習の効率が上がると考え、表記を発音式で表記しようとした。その音声言語を重視することは、次の指導例にも掲載され

ている。

長い話しや文章を耳で聞いて、全体として受け取る。そのままの形で発表する。

話しや文章のなかの要点を拾う。それを整理し、組み立てて発表する。

話しや文章の中心を強く頭に焼きつける。それをひと口に言いあらわす。

要点や中心を聞いて全体の話をつかむ。それを肉づけして発表する。

人の問いを間違いなく聞きわけて、出来ても出来なくても適当な答えをする。

聞きたい事柄をはつきり質問し、質問に合った答えを正しく引き出す。

いつでも言葉を正しく言いこなし、それが人に何を伝えたか見て取る。

言いたい事柄を手ぎわよくマツめ、悪い事や悪い言い方をさける。

進んでは、道理を知らせ、気持ちを訴え、意志を示す働きを適当に果す。

これらの具体例は音声言語による言語活動を重視することが多く、正しく理解し、伝達することで生産性を高めようとしている。

子供が、そーして国民が、言葉お助けとして自分おさらに必要なことお理解し、また表現し、他人と交渉し、関係を結び、言葉の支配者となって、生産お発展させ、生活お高める様にするための、言語生活についてのキソ訓練だ。

単に生産性を高めるのではなく、人間関係を構築し、その構築から、生産が高まるとしているのであるから、ここでの「言語生活」の語は、人間関係構築行為の結果ということになるのである。

この考えは経済比較だけでなく、黒滝チカラの実体験から影響されている。小学生の時に大正自由主義の影響下にあった教育を受けてきたので、その当時の教育を回想している。

自由教育から導かれた当日の国語教育では、何よりも子供の自分からの活動が重んじられ、子供の心子供言葉が高くみとめ、子供を研究して子供の活動をうながし、導き引き立てることが教師の仕事の中心となつた。

(中略)

窓から流れ入る朝風のように、教室を明るく生き生きさせ、昨日と全く変わつた世界にしてくれた感激を、その頃小学生だつた私は一生忘れることは出来ない！

大正自由教育では話すことを重点的にした言語活動が多く行われていた。黒滝チカラも子供時代に自発的な活動を通して、学習し、自分の活動を重んじられていたという自らの体験が、教師になっても影響を与えたのである。生活主義教育は児童の自発的な言語活動を重視するのであり、それは、大正自由教育の延長であるということができよう。

この子供の時の教育体験が黒滝チカラの言語活動を重視する教育への意識を高めたというのであれば、当時の国語教育についてはどのように捉えていたのであろうか。

言語としての国語そのものの性質や働きについて目を開かせないで「文章機構」を撫でまわさせたり、「叙述面」をあっさり後にして高い高い何かに分けのぼり、うがちすぎた「こころ」や「涙」を押しついたりした。

感動させることを重点に置いたために、記述された表現をしっかりと受け取らずに、恣意的な内容を知識のように押しつけられることになりやすいと指摘している。学習者が自ら学習する過程になっていないことが批判の中心である。そして、「形象の読み方」や「実践解釈」を「文章だけ見て、ほんとうの主観も客観も忘れている」と批判するのである。形象の読み方は垣内松三の理論であり、当時の多くの国語教育者が行っていた。それを批判している。それは、教師が決めた読みを児童が発見したかのように装うことへの批判である。

黒滝チカラは、国語教育の批判と自分の経験から、言語を単なる道具ではなく、人間関係構築、自身の思考を高めるため、生活向上との一体的な要素としてとらえ、その言語の向上のために言語活動を中心とした指導方法を意識していた。それは大正自由教育からの児童中心主義の影響を大きく受けていて、いわば、大正から昭和初期にかけての国語教育の方法論を収束していった結果としてまとめられたものである。

#### 4. 生活主義教育の言語活動意識の問題と課題

すべての生活主義教育者を調査したわけではないが、その中心人物の城戸幡太郎と黒滝チカラの言説から、生活主義教育での国語教育者、特に城戸幡太郎と黒滝チカラの言語活動意識の特徴は、次の2点にまとめられる。

- ①生活向上の観点から、子供の主体的な言語活動を意識していた。
- ②社会生活での音声言語利用の比率から、文字言語よりも音声言語の活動を重視した。さらに、黒滝チカラと村山俊太郎からは、次の点も特徴として挙げられよう。
- ③人間関係構築の行為として言語活動の意識を持っていた。

特に、黒滝チカラが言語活動を重視した要因が、自らの体験の大正自由教育にあったので、生活主義教育の言語活動への意識には、大正自由教育の影響が少なからずあったと言える。

この意識は、大正自由教育、および昭和戦前期で「言語生活」を国語教育の目標としていた国語教育者、河野伊三郎、遠藤熊吉、小笠原文次郎、丸山林平の意識と共通するものである<sup>(19)</sup>。これにより、この黒滝チカラと共通する意識は、当時の国語教育者がそれまでの反省から考え出したのであり、それは、一つの理論から形成されたというよりも、大

正自由教育から流れる国語教育の歴史から生み出した結果であり、それが偶然でなく必然として捉えることができるのなら、この言語活動意識は生活主義教育の特徴として収まる者ではなく、当時の国語教育の思潮として考えることができよう。

なお、今回の調査では西尾実の言語活動主義、シャルル・バイイなどの影響関係については、証左を得られなかった。これらの点も含めて、生活主義教育者以外の言語活動への意識を調査することで、昭和戦前期での言語活動主義教育の実態を捉えることができ、戦間期および戦後教育への影響関係を明らかにしていくことが可能になると思われる。

—注

- (1) 『教育・国語教育』は厚生閣書店より1931(昭和6)年4月に創刊され、当初、千葉春雄が編集したが、後に編集をはずされる。『教育・国語』と誌名変更し、戦前の雑誌統廃合により、『教室』と誌名と内容を変更したのちに、廃刊となる。
- (2) 『生活学校』は児童の村生活教育研究会が編集し、1935(昭和10)年1月に創刊。当初、厚生閣より、後に扶桑社より刊行。
- (3) 『綴方生活』は、1929(昭和4)年10月に文園社より創刊され、後に発刊元を郷土社に変更し、再び文園社より刊行される。
- (4) 山田清人『教育科学運動史』、国土社、1968年11月、pp.11
- (5) 平野婦美子(1907年-2001年)は国語教育者。『女教師の記録』で知られる。平野の国語教育指導法については、浅井幸子「生活綴方における対話の教育の系譜」『和光大学現代人間学部紀要 第3号』、和光大学、2010年3月、pp.25-40 に詳しい。
- (6) 滑川道夫(1906年-1992年)は国語教育者。1930年『北方教育』を創刊し、生活綴方運動を展開した。
- (7) 城戸幡太郎『教育科学七十年』、北海道大学図書刊行会、1978年10月、p.80
- (8) 民間教育史料研究会『教育科学の誕生』、大月書店、1997年1月、pp.65-76
- (9) 留岡清男「酪聯と酪農義塾」『教育』、岩波書店、昭和12年10月号、pp.56-69
- (10) 城戸幡太郎「生活学校巡礼」『教育』、岩波書店、昭和12年10月号、pp.48-55
- (11) 高橋啓吾「生活指導過信論」『生活学校』、厚生閣、昭和13年1月号、pp.42-46
- (12) 加藤周四郎「教室的良心の行方」『生活学校』、厚生閣、昭和13年1月号、pp.47-52
- (13) 言語生活の語は、井上哲次郎・元良勇次郎・中島力造『英獨佛和 哲學字彙』、東洋館書店、1911(明治44)年1月に「Sprachleben」の訳語として登場するのを確認している。現時点ではこれよりも前の文献での使用は見られない。昭和初期の国語教育では国語生活を文字言語で、言語生活を音声言語で使い分けている例が石黒魯平、小笠原文次郎、丸山林平などの国語教育者の執筆に見られる。
- (14) 城戸幡太郎『国語表現学』、賢文館、昭和10年10月、pp.327-367
- (15) 黒滝チカラ(1907年-1993年)は、出生時の名は雲助であったが、戦後、チカラと改名する。成至名の著書もあるが、これは教員免職の後に池袋3丁目に開設した私塾である「成至塾」にちなんだ号である。1927(昭和2)年神奈川師範を卒業し、各小学校で教壇に立つ。1930(昭和5)年5月には「全日本教員組合」(後の「日本教育労働者組合」)を設立するなど、積極的に労働組合員として活動していた。1931(昭和6)年に三度目の検挙により免職となる。以降、教壇に立つことなく、国語運動を進める。また、私塾を開き、雑誌に投稿するなど、教育活動を続けていく。国語国字問題にも興味があり、カナモジカイやエスプラント運動を展開した時期もあった。略歴は『国語国字教室』、牧書店、昭和39年の巻末にある。また、『現代教育史事典』、東京書籍、2002年に小林千枝子による解説がある。
- (16) 黒滝成至『生活主義 言語理論と国語教育』、厚生閣、昭和13年11月
- (17) 村山俊太郎「生活文化への国語教育とその技術」『教育・国語』、厚生閣、昭和15年1月号、pp.74-

- (18) 黒滝成至『国語の発展と国民教育』、扶桑閣、昭和12年1月、pp.122
- (19) 以下の拙稿による。
- 黒川孝広「『言語生活』『国語生活』の概念の生成」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊第8号-1、2000年9月、早稲田大学
- 黒川孝広「遠藤熊吉におけるキーワードとしての『言語生活』」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊第8号-2、2001年3月、早稲田大学
- 黒川孝広「小笠原文次郎におけるキーワードとしての『言語生活』」早稲田大学国語教育学会『早稲田大学国語教育研究』第21集、2001年3月、早稲田大学国語教育学会
- 黒川孝広「国民学校国民科国語の成立過程に見られる言語活動意識」『国語科教育』第49集、2001年8月、全国大学国語教育学会
- 黒川孝広「丸山林平におけるキーワードとしての『言語生活』」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊9号-1、2001年9月、早稲田大学